新入生のみなさん、入学おめでとうございます。教職員を代表して、こころから歓迎し、お祝い申しあげます。またご父母の皆様、ご家族の皆様にもこころよりお慶びを申しあげます。

目白大学の母体の目白学園が誕生したのは大正 12 年（1923 年）のことです。ですので、本年がちょうど創立百周年となります。研心学園という専門学校からスタートした本学園に 4 年生大学が岩槻に誕生したのが 1994 年で、現在の人間学部と社会学部の前身である人間社会学部が新宿キャンパスに出来たのがちょうど 2000 年です。その後、2002 年に経営学部、2005 年に外国語学部と保健医療学部、2006 年に看護学部が開設され、2007 年には人間社会学部が人間学部と社会学部に改組されました。2018 年にメディア学部、2020 年に心理学部がそれぞれ創設され、また大学院は 1999 年に国際交流研究科からスタートしています。縁あって本学に進まれたみなさんと、みなさんの先輩方と共に創立百周年を迎えたことを大変うれしく思っています。

本学の建学の精神は「主・師・親」で、これは学園の創設者佐藤重遠先生が日蓮の『開目抄』という本から採った言葉です。主師親の 3 つの文字が表す言葉の意味は奥が深く、佐藤重遠先生ののち、学園を受け継いだ、本学の先輩の教員たちも、その意味するところを研究して来ました。本学のホームページにもその現代的な解釈が載っているのはご覧になった方も多いと思います。総じて言えば、主師親とは、人々が尊重すべき 3 つの徳であり、「主」は自分が生きている社会を守り、また社会に貢献すること、「師」は、知恵を大事にして人を導きまた学ぶこと、「親」は人を慈しみ、愛情をそそぐこと、と解釈できます。

創設者佐藤重遠先生は宮崎県の貧しい小作農の子どもで、普通ならばとても上の学校には進めない家庭でした。しかし幼い時から勉学に優れ、その才能を惜しんだ先生の取り計らいで、裕福な家に住み込みで働きながら、難関の延岡中学校に進み、さらに同じように中学校の先生の推薦で、東京に出て、第一高等学校から東京帝国大学を卒業したという努力家です。その佐藤先生が実業界から政治の世界に入ったころ、東京では学校不足に悩み、当時は義務教育でなかった中学校に進める生徒が進学希望者の 25%にも満たないという状況でした。佐藤重遠先生はなんとか若者に勉学の機会を広げたいと考えて、方々を奔走して作ったのがこの学園です。初めは少ない人数でしたが、勉強をしたいという若者が集まってきて本学園がスタートしました。それは自分が貧しい生まれで、周りの人に世話になったお陰で、勉強の機会が与えられて今があるということを痛感し、社会に役立ちたいという気持ちがあったからにほかなりません。社会に役立つことこれが「主」です。そして、この学校で、知恵を磨き授けること（これが「師」です）、そして生徒たちに愛情を持って育てること（これが「親」です）を実現したと言えます。佐藤先生の主師親の精神を受け継いだのが、現在の目白大学です。その精神を持って教職員はみなさんに接しますので、縁あってこの本学を選ばれたみなさんにも、同じ精神を忘れずに学んでいただきたいと考えております。

本学に入るにあたって、みなさんにお願いしたいことは、何事も自分の頭で考えながら、自分自身の目標をいつも頭に入れて、学生生活を過ごしてほしいということです。自分の目標はまだ定まっていないという方は、それを先のこととは思わず、毎日、やはり自分の頭を使って考えて自身の夢・目標を定めてほしいと思います。

しかしながら、現代社会において、実際に自分の頭でものを考えるということは、それほど容易なことではないと思うこともあります。

まず現代は、昔とは比べものにならない情報社会となり、この 10 年ほどで インターネットや媒体としてのパソコンやスマートフォンが飛躍的に普及し、ツィッターや Instagram や Facebook あるいは LINE などのソーシャルネットワークサービスで、誰もが情報を受け取る側だけでなく、発信する側にもなれるようになりました。そうした中で、我々はそれを読んだり、返事をしたり、あるいはネットのニュースを見て、良いとか悪いとか、好きとか嫌いとか、即座に反応しています。もしかしたら、それは物を考えているというより、周りの雰囲気を見ながら、ただ反応しているだけになっている状態なのかもしれません。

また最近の若い方たちは以前ほどテレビを見ないとも聞きますが、テレビの情報なども同じで、発信する側が話題にするものは、社会的な重要度よりも、宣伝や経済効果に利することものが選ばれる傾向が強くなっているとも言われていて、なんの気なしにそれを受け入れていると、考えるための前提である「公平な情報」が怪しくなってくることもあるでしょう。

ネット社会では、以前よりもずっと時代の雰囲気が圧力のようのしかかっているとも言えるので、自分が発信したり、返事を書いたりする場合は、知らず知らず常に周りの様子を見ながら、人からどう評価されるか、ということを気にするということにもなってしまいがちです。

ですが、大事なことは、他人の評価ではありません。人から褒められても、自分ではまだまだと思ったら、自分が満足することをめざして進んで行くしかありません。他人からほめられなければ満足しないというのでは、まだ駆け出し、ということで、自分で自分自身の評価ができるということ、そして自分で良いと思うことを達成することが一番重要なことなのです。

人間関係を築くことが大事と言われますが、それは人と合わせるということを意味するわけではありません。周りと意見が違ったりするのは、むしろ当然で、仮に何かを決めるときに意見が違った場合には、今問題にしていることは何かということを考えて、冷静な話し合いができるようになることが大事です。本来、意見が違うということと対立をするということは別のことですが、現代において、特に日本人の場合は、ともすると、意見が違うことは関係が悪くなることと取られがちです。しかし、そもそも目的はなんだったのか、と考えれば、感情的な対立は避けられるはずです。

学科によって、国家試験合格や採用試験の合格を目標にしている学科とそうでない学科がありますが、さまざまなことが日々起こる現代社会において、どんな状況でも、自分の目標を常に見定めて、自分の頭で考えられるようになることが大事で、実は、そのためにこれから勉強するのだと言うことが出来ます。

自分が本当にやりたいことは何か、そして自分の目標としてきたことは何かを見失わず、自分がしたことがその目標に向かっているのか、方向が合っているとしたら、目標達成までに何をこれからすれば良いのか、それを常に見つめることが大事なのだと思います。

みなさんはこれから大学、または大学院の生活が始まります。近代大学の起源のひとつは、イタリアのボローニャというところで、ボローニャにはイルネリウスなど有名なローマ法

学者が何人かいたので、法律を学びたい若者が集まってきたことが始まりです。大学のことを英語で university と言いますが、そのもともとの意味は、universe という語に似ているので、「宇宙」に関係したような意味と思いたくなりますが、実際には「組合」という意味です。組合のことを昔はギルドとも言いましたが、uni は 1 つにするという意味から来ていて、ひとりひとりが偉い先生に高いお金を払って、それぞれが教えてもらっていては大変なので、学びたい人たちがひとつに寄り集まって学費を集め、偉い先生方を来てもらって「組合」を作り、勉強するためのひとつの組織体を作ったということ、これが university、ラテン語では universitas（ウニウェルシタース）と言われる大学の始まりです。世界最初の校則は、学生のギルド（組合）から教師達への規則で、「学生ギルド（組合）に無断で授業を休まない」「学生ギルド（組合）に無断で都市から出ない」ということだったそうです。

日本の大学はそれとは異なり、国を発展させるための人材を育てようとしたことが始まりで、既にできている大学に自分が入る、という意識だと思います。しかし、たとえば授業の課題などで大変だと思ったりした時、何かの理由で寝不足で授業に行くのはつらいなと思ったりした時は、もともとは学びたい人が集まって、先生を雇ったという大学の起源を思い起こしてくださると良いと思います。つまり、義務としてやらされているという意識ではなく、自分たち学生がよりよく学べるように、自分たちも大学に関わっていくという気持ちをもってくだされば、勉強にも自分から取り組めるようになり、よりよい学生生活になると思います。

現在、本学には新宿キャンパス、さいたま岩槻キャンパス、国立埼玉病院キャンパスの 3 キャンパスに、8 学部 16 学科、大学院 7 研究科 11 専攻があり、みなさんはそれぞれの学科、研究科の特徴に従って。資格を取ることや語学の力を身につけたり、目指すところは異なっていると思います。しかし、資格取得や技術を身につけることは、それを教えてもらうと考えないほうがよいかもしれません。

人は日常の生活の中で、普通は、自分はいつかはこの世から去らなければならないとか、生きる意味は何かなどと、考えることはありません。しかし、仮に自分の生きる意味を考えたとしても、人はその生きる意味を考える前に既にこの世に生を受け、存在してしまっています。ある意味、私たちは何の道しるべもないこの世界に投げ出されてしまっています。何をやっても自由だが、しかし何の保証もない世界にいるとも言えます。

一方で、私たちは先ほど述べたように、ネット社会や情報社会の中で、自ら制約を受ける世界に入り、知らず知らず作られた雰囲気の中に入り込み、同調圧力がかかる状況を強いられるところがあります。言ってみれば、同じノリでいないといけないような状況で、それに関わらない物はノリが悪いと言われ、排除されるかもしれないということで、もしかしたら、そうした環境、ある意味環境のノリに乗っ取られているという言い方もできます。もしみなさんの中に、片時もスマートフォンを放せないという方がいたら、そういう状況になっている危険があります。

勉強をするということは、そうした状況やノリを一旦断ち切ることでもあります。単に知識を集積するだけでなく、その中で自分で、ああそうかと何かに気付くこと、それが初めに述べた自分の頭で考えることであり、それによって、周りに左右されない自分なりの考えをもつことができます。そうした考えがあれば、日常生活のつまらない揉め事などに左右され

ない自分を作ることができますし、そのようにして自分なりの考えを持つ能力こそが、人間の価値だと言えます。つまり勉強とは、自分の価値を高めるための行為であると言えます。そしてそうした行為ができる人は、ひとに対しても愛情を持って接することができるのではないでしょうか。

私たちは道しるべのないこの世界に投げ出されていると言いましたが、つまりは必然的にこの世界、この社会と関わっています。佐藤重遠先生が大事にした主師親の考えは、つまり知恵と愛情を持って、その社会に対して関わり、貢献していくということに他なりません。どうかみなさんも、そうした精神を受け継いで、自分の価値を高めるために大学生活および大学院の生活を充実させていただきいとお願いし、これを以て学長の告示といたします。

2023 年 4 月 1 日

目白大学学長　太原　孝英